

\*\*\*\*\*  
開講科目名：刑事法研究（4単位）  
開設年次：2年 3年 4年  
開設学部：法学研究科修士課程法学専攻  
担当者：清水 裕樹  
\*\*\*\*\*

## 《授業の概要》

### ＜1年間を通じての授業の目標＞

前期の授業の中で、日本の刑法について自ら学ぶ力をつける。  
後期の授業の中で、日本の犯罪の現状を知り、犯罪に立ち向かうためにいかなる方策をとることができるかについて学ぶ。  
前後期で学ぶ内容については以下のとおりである。

### ＜＜前期＞＞

#### ＜授業の目標＞

刑法に関する一般向けの解説書を丁寧に読み込むことを通じて、  
（1）刑法を中心とする、刑事法に特徴的な考え方を身に付けることができるようになることを目指す。  
（2）テキストを批判的に読み込むことを通じて、テキストに指示されていない文献等を自発的に調査する姿勢を身につけることを目指す。  
（3）犯罪という社会問題に対して、刑法という法律にできること、できないことについての射程と限界とを身に付け、犯罪を減らすためにいかなる方策が必要かという問題にみずから立ち向かうことができる。

### ＜授業概要＞

下記テキストの内容を「できる限り完全に」理解することを目指す。学習の方法にはさまざまなものがあるが、手頃なテキストにしっかりと取り組むというの、1つのやり方であろうと考えられる。わからない用語があれば調べ、一つの段落の、さらには段落相互の、章全体の、最終的にはテキスト全体の中に意味がわからないところがなくなるよう、繰り返し読み、興味をひかれた部分があれば他の文献や資料にもあたってより深い理解を得るという学び方を、この授業では目指したい。  
したがって、授業にあたっては履修者がテキストをすでに読んできたことは当然の前提として、無作為に理解度をチェックし合う（教員もまた、学ぶ者であり、特になれに基づく誤解に陥っていないかのチェックを受ける立場である）ことで進めてゆきたい。

### ＜授業計画＞

下記は授業計画の目安である。ただし、理解しながら進むことを優先するので、実際には相当に進みが遅くなることも予想される。

- 第1回 この授業について 刑法を学ぶ意義
- 第2回 犯罪と刑罰とは何なのか (1) 罪と罰
- 第3回 犯罪と刑罰とは何なのか (2) 刑事手続のあらまし
- 第4回 犯罪と刑罰とは何なのか (3) 法的な禁止の対象と手段
- 第5回 犯罪は法律で作られる (1) 罪刑法定主義の意義と法律主義
- 第6回 犯罪は法律で作られる (2) 刑罰法規不遡及の原則と内容の適正性の原則
- 第7回 犯罪はどんなときに成立するのか (1) 結果としての犯罪被害と因果関係
- 第8回 犯罪はどんなときに成立するのか (2) 実行行為
- 第9回 犯罪はどんなときに成立するのか (3) 故意と過失
- 第10回 犯罪はどんなときに成立するのか (4) 未遂と共犯
- 第11回 犯罪はどんなときに成立しないか (1) 違法性阻却事由
- 第12回 犯罪はどんなときに成立しないか (2) 正当防衛
- 第13回 「はしがき」の設問にどう答えるか
- 第14回 テキストで扱われなかった刑事法の論点
- 第15回 刑法を学ぶ意義を問い直す

#### <評価方法>

授業への参加の度合い（授業中の課題への取り組み＋宿題等への取り組み）40%  
レポート10%  
で評価する。

#### <<後期>>

#### <授業の目標>

「日本の犯罪は減少し続けている」と主張するテキストを批判的に読むことを通じて、犯罪という社会問題に対してどのように立ち向かうことができるかを考える。  
この授業を通じて獲得することが期待される能力は以下のとおりである。

- (1) 日本の犯罪の現状に関する理解を得る。
- (2) 『犯罪白書』等に掲載されている統計データの見方を身につける。
- (3) 犯罪に対して刑罰以外にどのような手段で立ち向かえるかということのアイディアを提示できる。

#### <授業の概要>

現代日本の犯罪状況と、犯罪予防に関する対策について、テキストを読みながら考える授業を行う。

本授業は、いわゆる講義形式ではなく、履修者による参加を求めるものである。2回目からの授業では、下記テキストを使用するので、履修を希望する者は必ずそれまでに購入すること。

具体的な授業の進め方は、履修者数の規模を見て考えるが、最低限履修者は、授業時間までにテキストを読み、考え、必要に応じて不明な点を調べた上で、自分の考えを準備した上で授業に臨むことが求められる。

現在考えている授業進行予定は、下記の通りである。

- 第1回 犯罪現象の認識と刑事政策
- 第2回 犯罪現象をどう認識するか
- 第3回 警察統計から見えるものと見えないもの
- 第4回 現代日本の犯罪の「いま」
- 第5回 『犯罪白書』の作られ方
- 第6回 『犯罪白書』の受け入れられ方
- 第7回 「体感治安」と「犯罪不安」
- 第8回 防犯対策の意味
- 第9回 なぜ厳罰化が語られるのか
- 第10回 刑罰と犯罪予防
- 第11回 社会政策としての刑事政策
- 第12回 刑務所と精神病院
- 第13回 障害と犯罪
- 第14回 困っているのは誰か
- 第15回 犯罪と犯罪者に対して社会は何をできるか

#### <評価方法>

普段の授業への参加姿勢（授業中の課題への取り組み、宿題等への取り組み）40%  
レポート10% </NAIYO

#### <<テキスト>>

山口厚『刑法入門』岩波新書2008年

荻上チキ・浜井浩一『新・犯罪論「犯罪減少社会」でこれからすべきこと』現代人文社2015年

#### <参考書>

内藤謙『刑法原論』岩波書店1997年、西田典之『刑法』放送大学教育振興会2001年、井田良『基礎から学ぶ刑事法』2017年、団藤重光『刑法綱要総論』1990年、平野龍一『刑法総論I・II』有斐閣（1972・75年）

法務省法務総合研究所編『平成29年版 犯罪白書』昭和情報プロセス2017年

外山ひとみ『All Color ニッポンの刑務所30』光文社2013年

山本譲司『累犯障害者』新潮文庫2009年

浜井浩一『罪を犯した人を排除しないイタリアの挑戦』現代人文社2013年

フランコ・バザーリア『バザーリア講演録 自由こそ治療だ!』岩波書店2017年